

現われ、猛射を浴びせる状況であった。主力が遠ざかるまで敵の攻撃を阻止しながら待つ気持は実に苦しいものである。

作戰各兵団は、軍命令に基づき松滋河右岸地区に反転し、揚子江を渡河し、一月初頭、それぞれ原駐地に帰還して本作戦を終了した。

軍旗を捧持し重圍脱出

三重県 松本荘衛

私は大正十一年二月十九日生まれで、徴兵検査を受けた昭和十七年の十二月十日、中部第三十八部隊へ入ったので、同年次の殆どが、翌十八年一月十日入営ですから一番初めに軍隊へ入ったわけです。

入営して十日程、十二月二十一日には約千人の戦友と一緒に、阿漕駅から下関↓釜山↓奉天↓山海関經由で、南京中央兵站に入ったのです。十八年の正月は南京で迎えたが、揚子江を溯航し安徽省銅陵の連隊本部で教育を

受けました。

私は第三機関銃中隊でしたが幹部候補を五人受けて、甲種幹部候補生は私一人だったと記憶しています。連隊では百人余志願して予備士官学校へ入ったのは二十余人ぐらいではないですか。

私の同年兵や、乙種幹部候補生で戦死しているひとが多いのですが、私が保定予備士官学校在学中に中支では、常德作戰があり、第一百十六師団（嵐部隊）も第十三軍隷下で参戦し、また、沔桂作戰第一期の衡陽攻略戦ではその主力として四十五日間戦い、私の歩兵百三十三連隊も黒瀬連隊長は玉碎を覚悟した程でした。今もよく言われるのですが「松本君が予備士官学校へ行かなかつたら、とっくに死んでいたよ」と、それ程犠牲者が出たわけで、或る意味では命拾いをしたわけでした。

昭和二十年二月、興福橋討伐中、雪の中で「第三機関銃中隊の松本少尉は本日中に連隊本部へ出頭し、松井副官の指示を受くべし」という連隊命令が来たのです。始めは何だか判らなかつたが、山中少尉の交替として旗手候補になったということでした。

中隊の名譽、大隊の名譽だといわれるが、「責任は重
いぞ、軍旗守護は勿論のこと、軍の機密書類保管責任者
だ。もしものがあれば切腹だぞ、覚悟しろよ」と、
覚悟、覚悟で脅迫されているような、誉められているよ
うな、重苦しい一夜を過ごした記憶があります。帰隊す
ると、心配してくれる部下との別れが、身を切られるよ
りつらい思いでした。

芷江作戰、二か月余の間の苦闘を話せば、とても一日
では語り尽くせませんので、青岩陣地の攻撃戦というよ
り四圍敵に包圍された戦いと、軍旗を捧持しての脱出と
いう状況をお話してみたいと思います。四月十六日未明
資江（宝慶川）を渡河し行動開始するわけですが、宝慶
南部地区にいた我が連隊長は作戰行動の志気を昂揚する
意味で宝慶橋南詰において軍旗に拝謁するよう指示され
た。これが見納めになるだろう将兵が軍旗に最後のお別
れを告げたわけです。

私は高台に登って軍旗を捧持する。春の夜風に大きく
揺れる軍旗は未だに無傷、焚く篝火に映えて赤く輝いて
いました。連隊長以下乗馬将校が通過する。中隊長の

「頭右」の号令に歩調を取る軍靴の響きは宝慶の町にこ
だまして橋の彼方に消えて行きました。

軍旗を仰ぐ将兵は、軍旗のもとで死ぬという事実がひ
そんでいっているわけです。そして再び軍旗を見ることが出
来なかった人たちが無数にいたわけです。

緒戦は山門陣地の攻略ですが、ここでは青岩陣地攻略
戦の様様を話します。作戰の中央は風兵団で、右は弾兵
団です。歩兵百三十三連隊の第二大隊は、主力と弾部隊
の中間を進撃していたのですが、弾部隊が精悦だといっ
ても実戦経験がなく、膠着状態で進めないのです。第二
大隊は錐揉み状に急進し過ぎ敵中に突出してしまっただ
です。

第一大隊は、山を越えて攻撃前進するが、後は敵やら
友軍やら見わけがつかない。銃砲火は昼夜を問わず山に
こだまして毎日毎日が戦闘の連続です。これも前進出来
ず膠着状態で、ついには敵を防御するのに競々としてい
る。連隊ばかりでなく師団の四圍は皆敵で、この様な状
況では生きて帰れるかどうか非常にむづかしくなった。

突然大音響が大地を揺るがす。何事か判らなかつたが

米式ロケット弾でした。連隊長の当番兵一人が何処かへ吹飛んでわからなくなったらしい。戦況は一進一退、第一大隊の攻撃も進まず犠牲者が増えるのみ、しかし、敵は増援部隊が続々到着している。こちらは、攻撃どころか死守するのが精一杯の状況でした。

加川連隊長は予備隊の第三大隊を迂回させて、敵の右側から攻撃すべく意を決し、当時師団予備隊だった第十二中隊を第三大隊に復帰させて、第一大隊は現在地に対峙させたまま行動を開始したわけです。

連隊旗は連隊長と行動を共にすべく、私は左方向に移動して山を降りる。軍公路を横断して一山越せば見渡す限りの大平野に出るのだが、湿田地帯のため思うように前進出来ず、道無い道を左へ左へと回って、敵の背後に出ようと急行軍をしたのです。

ところがこの平地を行軍中、他の方面からまた一つの軍旗が来て道路の交叉点でばったり会ったのです。福知山の百二十連隊も我々同様に敵に前進をはまれここへ来たらしいのです。

作戦中に軍旗と軍旗がかち合うなんてことは滅多にな

い筈ですよ。互いに数^キ、数十^キの間隔をおいて同方向に併列攻撃前進している。連隊が戦場で合うということとは、強力な敵の反抗に会って右往左往して、敵陣地の弱点を衝いて攻撃しようと、方向を転換している証拠で、明らかに我軍敗色のきざしが見え始めて来ているということですよ。

お互いに「頑張れ」「頑張れ」と励ましながら別れたが、果たして百二十連隊の軍旗は何処へ行ったのか、其の後会うことはありませんでした。

第三大隊は、夕方近く山麓に到着して攻撃準備にかかったのですが、この前方の山が後で第三大隊主力が全滅に近い大損害を受けた青岩陣地なのです。

略図にあるように、弾部隊（一個連隊）は右翼で、第三百三十三連隊の第二大隊は突出して龍潭舗で瀕死の状態、前進不能。第一大隊も敵と対峙して陣地死守防戦中。第三大隊と連隊本部は左に移動して荷の重い青岩陣地を攻撃した事になったわけです。結局は三方に敵を受け、敵は更に増援されているという状態でした。

右翼から左翼に移動、山の陣地を攻撃した第三大隊は

疲労困憊の極に達し、反転命令でも出ない限り、第三大隊、連隊本部は全滅覚悟で、これが芷江作戦の山場ともいえたのです。この陣地を抜いても、第二、第三の陣地があり、米軍機の銃爆撃、特に焼土作戦では進撃は不能と思われました。

のるか、そるかを決戦攻撃が開始される頃、連隊長の伝令が来て、「直ぐ本部へ来て下さい」とのことです。連隊長は「松本少尉ガソリンは準備してあるか」と聞かれたので「準備してあります」と答えると、「そうか、軍旗をしっかりと頼むぞ」と、何時もの元気が無いんですね。

私は愈々最後の時が来たと思えましたよ。頼みの黒沢第三大隊は青岩陣地に向かって攻撃を開始している。攻撃頓挫すれば、第三百三十三連隊は戦闘力が無くなって丸裸同然ですから。

この時には、連隊旗に火をかけて全員決死の突撃を敢行する決心です。私はこの作戦出発当時から、林上等兵にガソリンを水筒に入れ携行させてあるから、何時如何なる苦境に会おうとも、直ぐ軍旗の焼却が出来るように準備していました。敵に奪われたら切腹してお詫びせね

ばならない。

銃砲声は次第に強く山野に響いている。敵機は間断なく超低空で銃撃を行っていく。我々は師団の反転命令を待っているのだが、反転どころか、「青岩陣地奪取」の命令を出している。愈々湖南省の青岩山麓が自分の墓穴かと思うと武者振いがしてきたのです。林上等兵に「ガソリンがあるか点検してみろ」というと、水筒を振って見て「あります」と元気に答える。緊迫した戦闘状況も知らぬまま、悠々と食事の準備をしている。呑気なものです。

薄暮から夜にかけて青岩陣地は一大決戦場となり、彼の銃火は山野に吠えて激戦の様子がうかがえる。皆一人だけ入る蝟壺を掘り身を穴にゆだねて、敵と数百メートルを隔てて対峙して時々頭をもたげては銃機の応戦です。なにしろ夜になると盲撃ちの銃火は熾烈に火を吹いているので、伝令の行動も出来ないぐらいです。

第三大隊―本部の連絡も出来ないから、三大隊の戦闘状況をつかむことも出来ない。勝ち戦か負け戦か消息不明ですが、敵は増援部隊も兵器も弾薬も続々と到着して

いる。友軍は補給が無いので、一発の弾丸も無駄に出来ないし、連絡に行ったまま帰らぬ者も数知れないのです。

蝟壺なら鉄砲弾は上をかすめて飛んでいくが、飛行機の機銃掃射が恐ろしい。食事も水も飲めない。地獄のような戦闘が毎日続いて、全滅の予感がひしひしと押し寄せてくる。師団の増援は全然無いから、今夜が戦闘の天王山、一発勝負の時期は刻々と迫って来る。其の時の気持ちは、生死を彷徨した者でなければ判らんでしょう。

そのうえ、敵機はドラム缶を落して点火する（焼夷弾、ナパーム弾？を落す）。焼土戦術です。森といわず、谷間から頂上まで火の海にしてしまつて、あまねく遮蔽出来ない焼野ヶ原となつてしまふ。山肌の一木一草に至るまで焼き尽くし、あわてて移動する友軍を、地上から空中から掃射して薙ぎ倒すのです。散兵壕なら連絡も取れるが、蝟壺じゃ身動き一つ出来ないですよ。地獄絵とは全くこのことで、生きているのが不思議なくらいです。山麓の連隊本部にも友軍の伝令、密偵、有線電話で悲報が続々と入って来ました。

五月五日、黒沢第三大隊長負傷下山、田原第九中隊長、

藤村第十一後任中隊長戦死など、中、小隊長で健全なものの殆ど無く、詳細は不明のまま青岩陣地攻撃は、下士官指導のもとに続行せられ、全員玉砕は火を見るより明らかとなった。我々連隊本部も同じ運命にさらされる時刻は刻々と迫って、青岩山麓は夕もやにつつまれて来ました。

そのうち大桑第三機関銃中隊長、中川小隊長重傷の伝令がとんで帰って来ました。第三機関銃隊には将校はなく下士官が代理で戦闘続行中である。私は動転して見舞いに行き「中隊長殿、松本少尉です、しっかりして下さい。」隊長は言葉が出ず、こっくりとうなづかれただけ。口から顎にかけ敵弾がかすめもぎ取られている。全くひどい傷だ、食物も通らない。木の葉を丸めて湯を流しこめる程度で人事不省に近い。野戦病院に入れなければ生命が無い。「急ぐんだ」と細い道を降りていく。直ぐ後方に中川少尉が「松本君やられた。歩けないのが残念だ、後を頼む」と、これも担架で後送されていった。軍医の松田見習士官と当番も、西村少尉も消息不明。思えば、祖国のためとはいえ、草いきれの大陸湖南の野の露と消

えた、戦友は死んでも死にきれずに鬼と化して、魂は宙にさまよっていることと、私は悲惨な気持ちで一杯でした。

第三大隊は、大隊長以下、中小隊は殆ど戦死或いは負傷し、軍の行動は麻痺状態で、守るに精一杯の蝟蝟戦争でした。連隊長はこれ以上戦闘を続行すれば全員玉砕あるのみの覚悟を定めて、予備中隊を第三大隊救援のための命令を下達しました。

師団司令部へは、「第百三十三連隊は全力をもって最後の総攻撃を敢行し、全員玉砕の覚悟」と打電、その準備のための命令を下達します。最後の総攻撃には軍旗も第一線に進出しなければならぬ。玉砕に際しては敵に奪取されることなく焼却又は、腹に巻いて譲らなければならないのですよ。生か死か、愈々最後の時が来たらしい。林上等兵のガソリンも使わにゃならないかも知れない。いよいよ総攻撃のための準備が完了して、今夜半全軍突入と決したのです。

人間死に直面すればどんな気持ちになるだろうと疑問だったのですが、比較的平静でした。妻子の無いせいだ

ろうか、余り狼狽もしないで、まだ食慾の方が旺盛でした。有るだけの煙草も分けあって喫いました。何時突撃命令が出るかも知れない。夕方、軍旗も出来るだけ保持し易い状態にして夜を待ちました。

致命的な敵弾を受けたら、軍旗は野ざらし、敵に強奪されるだろう。苦しみぬく弾丸を受けたら何としよう。今夜の総攻撃の行動についていろいろ考えたのですが、「エイなるようにしか成らない」比較的静かな森をそぞろ歩きながら、軍刀を抜いて立木をバサッと切り落としてみました。切れ味もいいし、拳銃も一発射ってみました。用意万端と、時を待ちながら最後の月を眺めて、故郷の影を慕ってひそかに別れを告げました。

今夜か、明日一日の生命だと思つと一抹の寂しさが押し寄せて、満二十三歳、折角生を得て今日まで此の身体を異国の名も無い土地に捨ててしまつとは。あたりは暗くなるし、遠く激しい射撃の音がこだましてくるのは敵の増援部隊が続々と、連隊の正面に投入されている様子で、勝戦は全くない。

最後の激戦が展開されようとした時、師団司令部から、

連隊本部に命令が無電で届いたので。それには「第百三十三連隊は今夜十二時を期し現在地を撤退し、洞口附近に反転集結すべし、爾後の行動については追って指示す」というものでした。

五月六日、反転に関する師団命令が下達されたその要旨と状況は次のようなものです。

一、師団は洞口附近に兵力を集集し後図をなす
二、歩兵第百三十三連隊は七日夜から二夜にわたり撤退すべし

第一夜（七日夜）高地上の火砲を平地におろす

第二夜（八日夜）前線歩兵を撤退せしむ

三、第一線を撤退せば月溪東側高地にて師団全般を收容し九日夜後衛となり後退 洞口東側に結集すべし

野砲兵一中隊を付す

全般に企図秘匿に特に留意せしめ 歩兵砲 速射砲は平地におろしたるあと万一の敵の出撃に對し対策をたたしめる また第一大隊には予め前日から十分準備せしめ 八日日没とともに撤退を開始せしめる 第三大隊には一般的那样に八日夜半から行動せし

め 月溪付近には九日天明前に到着 その東北地方地に集結せしめる（だが第一大隊は天明後しばらくして漸く到着した）……………

命令を受けて撤退に決まっただけで、部隊は三方に敵を受け包圍されていて、洞口に通ずる道は軍公路しか無い。両方の山には敵が出没して射撃を加えるだろうし、包圍網を突破しての反転は極めて困難な作戦なのです。

撤退は攻撃前進より危険です。進んでも退いても、結果的には死を覚悟しなければならない。だけど、暗夜にまぎれて脱出すれば、生命の保障に一累の望みはあるわけで、勇気が出てくる。これで命も二三日は延びそうだ。軍旗も焼かずに持ち帰れるかも知れない。無事宝慶地区へ帰れたらと心強く軍旗の竿を握りしめました。

第十二中隊が後衛先兵中隊で、敵と対峙しながら後退するわけですから大変だが、犠牲になってもらわなければならぬ。第一番の後退は先づ軍旗中隊です。暗くなって道なき道を降り、川を渡って三十分余りで軍公路に出ることが出来ました。これで助かった気持ちが出て、ホッとしたわけです。

しかし、青岩陣地攻撃で戦死した多数の第三大隊将兵は本当に気の毒です。連日の暑さで屍は腐敗しているだろう。埋葬の暇も無いまま放置されているものもある。ただ手首だけが戦友に護持されて、遺族に送られる遺骨として生のまま持ち帰ったのだが、恐らく野犬の餌食となったものも幾人かある。遺族の方には申し訳ないが、敗戦の憂き目、目もあてられない惨状、後髪引かれる思い、戦友の冥福を祈りながら軍公路を洞口へ強行軍しました。

不思議なものです。重い軍旗も重いとは感じなかった。只助かりたい一心で肩にかついで先頭切って走るので。大分疲れてきたので、軍旗を腹に巻いて桿だけかつかいでまた歩く。後衛先兵が気がかりでしたが、後方が比較的に静かだったので、うまく脱出したなどと安心すると、静かな山峡の道路が軍靴の音だけザクザクと聞こえる。

初夏だから夜明けが早い。東が白みかける頃まで休まず三十キロぐらいは歩いたでしょう。霧が深く、曇天なので敵機も姿をあらわさない。朝飯どころじゃない。雨がシトシトと降り出した。晴れていれば空からの機銃掃

射や爆撃のため犠牲も出たろうに、雨が幸いました。洞口近しの情報に足は勇んで強行軍が続行され、昼頃洞口の街へついて、これで大丈夫だろうとなった。正直なもので腹が空いた。兵隊は飯盒炊さんに一生懸命です。撤退は実際は大変時間がかかった。命令の三に、「第一線を撤退せば月溪東方側高地にて師団全般を收容し、九日夜後衛となり後退、洞口東側に集結すべし」とあるのです。ですから月溪に出なければならぬ。それには十時間かかった。いかに夜間の行動が困難であるかが判る。撤退は加川連隊長が月溪で第七中隊の一小隊を指揮して、撤退が遅れた第一大隊の最後の一兵が通過するまで確認した。その後命令にあるように後衛(師団の)となり、第三大隊を更に後衛として(第十二中隊後衛先兵)撤退した。洞口は第百二十連隊が確保していたということでした。

私はその後、連隊長に呼ばれ「松本少尉中隊に帰りたいか」と聞かれるので、余り突然のことなので「ハイ一体何があったのですか」と聞くと、「第三機関銃中隊は将校が一人も居なくなつた、お前の中隊だから、馴染み

深い貴官が行った方がいい」とのこと、その後、中隊に復帰した。

支那事変武漢攻略と浜松の艦砲射撃

岐阜県 岩田 義雄

私は大正七年一月七日生れ、昭和十二年に陸軍に志願をして、十三年一月十日富山の歩兵三十五連隊に入隊、三か月で一期の検閲、四月富山出発。本隊は徐州会戦中、留守隊の蘇州で教育。その後武漢攻略のため、揚子江の九江に敵前上陸し、攻略戦に初年兵で参加後、十五年八月十五日に除隊。十九年七月十二日、岐阜の中部四部隊に再召集し、浜松付近で、米軍の艦砲射撃を受けながら、本土防衛の第一線で勤務をして復員。

武漢攻略戦は第九師団（金沢）の富山の第三十五連隊の一初年兵として参加したのですけど、十三年八月四日、蘇州から列車で鎮江、そこから船で溯航（駆逐艦護衛）して、十八日に九江へ敵前上陸した。さらに瑞昌に前進

するのだが、食糧足りず、里芋ばかり食べて、下痢・大腸炎・赤痢・マラリヤなどで行軍に苦労した。

私は軽機関銃分隊だが、分隊長と射手がマラリヤで高熱、そのため機関銃と弾匣（弾薬箱）、病人の荷物を持って、初年兵の酷さを本当に味わった。

荷物を水牛にのせたところ、水の中に入ってしまい荷物が駄目。歩きながら野菜捜し、また雨や汗のためにマツチを濡らさないようにどんなに苦労したことか。濡らしたら、早く火を炊いているところへ行って火種をもらおう、そんなことでうちの分隊の炊事が一番遅い。戦闘も大変だが、行軍や裏方の方がもっと辛いことも多いのです。特に初年兵の時は、その厳寄せがほとんどくるわけです。

九月十二日午前四時 瑞昌出発。

十月四日 午後十時 東山を占領。

十月五日の晩、月の明るい夜、月が山に入るのを待つて東山を降りて、川を渡って箕心塙の一角にたどり着いたのです。

夜明けと同時に敵が三方から攻めてきて、何人かが戦死したり負傷をした。午後は迫撃砲を連続して発射して